

児童の謝罪に及ぼす親密性の影響

京都大学大学院 田村綾菜

The influence of the intimacy on children's apology

Kyoto University TAMURA, Ayana

要約

本研究は、相手との親密性によって、児童が謝罪する際の罪悪感や謝罪する理由が異なるかどうか、その発達の変化を検討することを目的とした。小学1, 3, 5年生 ($N=188$) を対象に、加害者が偶発的に被害者にぶつかってしまうという仮想場面を用いて、質問紙調査を行った。加害者の立場から、謝罪するかどうかの回答を求め、その際の罪悪感の程度および加害者が謝罪する理由(罰回避, 印象悪化抑制)についての評定を求めた。分析の結果、謝罪時の罪悪感は、親密性の高低に関わらず、1年生から5年生にかけて低くなることが示された。また、罰回避は、親密性の高低に関わらず、学年が上がるにつれて低くなるのに対し、印象悪化抑制では、同様の学年差がみられたのは親密性が低い場合のみで、親密性が高い場合には一貫して得点が高いことが示された。

【キー・ワード】 謝罪の理由, 親密性, 罪悪感, 児童

Abstract

Present study investigated whether the intimacy with victims affected children's guilt feelings and the reasons of their apologies. To examine the developmental changes of elementary school children, first, third, and fifth graders ($N=188$) were required to answer several questions in term of perpetrators after reading a fictitious story in which the perpetrator accidentally hit the victim. After children were asked whether they would apologize to the victim, they were required to rate their guilt feeling and the reasons of their apologies (avoidance of punishment and improving bad impression) with four points scale. Results revealed that their guilt feelings and their motives to avoid the punishment decreased as their grader advanced, regardless of high and low intimacy situations. Meanwhile, although their motive to improve bad impression decreased as their grader advanced in low intimacy situation, it was constantly high in all grade in high intimacy one.

【Key words】 reasons of apology, intimacy, guilt feelings, elementary school childhood

問題と目的

私たちは幼い頃から、何か悪いことをしたら謝り、謝られたら受け入れることを教えられる。この社会的なルールを学習することは、子どもの社会的発達において重要な課題であるといえる。なぜなら、このルールを共有していることで、対人葛藤を円滑に終結させることができると考えられるからである。実際、謝罪は対人葛藤場面において加害者が最もよく用いる言語的方略であるとされ (Itoi, Ohbuchi, & Fukuno, 1996)、多くの研究からその葛藤解決効果が実証されている。例えば、大学生を対象とした研究では、加害者の謝罪が被害者の抱く攻撃的感情を緩和する効果が示されている (Obuchi, Kameda, & Agarie, 1989)。また、幼児期から児童期の子どもを対象とした研究においても、謝罪は科せられる罰を軽減する罰回避の効果や、違反によって生じた加害者へのネガティブな印象を改善する印象悪化抑制の効果が示されている (Darby & Schlenker, 1982; 1989)。

発達的にみると、6歳頃までには、責任を受容し、罪悪感の認識を伴った「誠実な謝罪」を獲得すると言われている (中川・山崎, 2005)。中川・山崎 (2005) は、5, 6歳児を対象に仮想場面を用いた調査を行い、誠実な謝罪の出現時期について検討している。その結果、6歳児はほとんどの子どもが責任を受容し、かつ罪悪感を認識すると答えるが、5歳児は責任の受容はあるが、罪悪感の認識まではしていない子どもが多いことがわかった。この結果から、6歳までの幼児が用いる謝罪には罪悪感が伴わず、保育者からの罰を回避するための「道具的謝罪」が多く、誠実な謝罪ができるようになるのは6歳以降であることが示唆された。

しかし、6歳頃までに誠実な謝罪が獲得されるとはいえ、私たちは常に罪悪感の伴う誠実な謝罪をするわけではない。大人を対象とした研究において、日本人は発言上謝罪するが、内心は謝罪する気持ちは持っておらず、対人関係を重視し、表面上自分の方が社会的関係で劣位にあることを示す、という印象操作の方法として多用されていることが示唆されている (齊藤・荻野, 2004)。また、幼児を対象とした研究では、6歳児でも、親密性の高い相手には誠実な謝罪を用いるが、親密性の低い相手には道具的謝罪を用いることが示されている (中川・山崎, 2004)。ただし、ここでいう幼児の道具的謝罪とは、保育者からの罰の回避を目的としたものである。このように、私たちが謝罪する理由には、印象操作のようなより戦略的なものから、幼児期に多くみられる保育者からの罰の回避まで、さまざまな種類があることがわかる。しかしながら、これらの謝罪の理由がどのように発達的に変化するのかは明らかになっていない。

また、誠実な謝罪を獲得した後の児童期の子どもを対象とした研究には、加害者の用いる謝罪のパターンなどを操作し、被害者の立場から謝罪の評価をさせるというものがある (Darby & Schlenker, 1982; 1989; Ohbuchi & Sato, 1994; 田村, 2008a, b)、加害者の立場から児童の謝罪について検討した研究は少ない。その中で、芝崎・山崎 (2008) は、小学2, 4, 6年生を対象に、違反に対する責任の大きさが加害者の行動予測および罪悪感の程度に及ぼす影響について検討している。その結果、児童が罪悪感を高く認識するのは、自己に非が認められない状況よりも、自己と他者に同等の責任が認められる状況においてであったが、児童が謝罪を選択するのは、反対に後者よりも前者の状況で多いという結果であった。このことから、罪悪感が十分に喚起されない状況において、児童は道具

的に謝罪する可能性が示唆された。しかし、学年差について、謝罪を選択するのは2年生よりも6年生で多いなど、加害者の行動予測に関する結果の分析にとどまり、児童がどのような理由に基づき謝罪を選択するかということについては検討されていない。また、芝崎・山崎（2009）は、小学2、4、6年生を対象に、罪悪感などの違反に対する認識が学年や性別によって異なるかどうかを検討している。その結果、自己に非がない場面において、男児では6年生よりも2、4年生の方が、女児では4、6年生よりも2年生の方が、罪悪感が高かった。しかしながら、そのような罪悪感と謝罪との関連は直接検討されていない。

以上のことから、本研究では、児童期の子どもを対象として、謝罪時の罪悪感および謝罪する理由の発達的变化を検討することを目的とした。なお、謝罪する理由については、謝罪の効果の認識として従来の研究でよく扱われてきた、罰回避と印象悪化抑制を取り上げる。罰回避は、幼児期に多いとされる「保育者からの罰の回避」としたが、児童期においても先生から怒られるのを避けるために謝罪することは多いことが予測される。ただし、8歳前後に他律的な道徳から自律的な道徳へと発達することから（Piaget, 1932）、次第に罰回避を理由に謝罪することは少なくなるのではないかと予測される。また、児童期は、幼児期に比べて仲間関係の比重が増大する時期であり、友達集団への受け入れについての関心が増加する（Parker & Gottman, 1989）といわれていることから、相手に嫌われないように謝罪が多くなることが予測されるため、印象悪化抑制についても検討した。

特に、親密な関係喪失への不安は、謝罪の強い動機づけになるとされ（McCullough, Rachal, Sandage, Worthington, Brown, & Hight, 1998）、謝罪する理由には相手との親密性が影響すると考えられる。これまで、謝罪行動や謝罪効果の認識と親密性との関連について検討されているが（早川, 2009; 芝崎, 2008）、謝罪する理由との関連については明らかにされていない。また、罪悪感に関しては、大人を対象に、親しい他者には罪悪感が生起しやすいことを報告した研究や（Baumeister, Reis, Delespaul, 1995）、幼児を対象に、親密性の高い他者には罪悪感の伴う誠実な謝罪を用いることを示した研究がある（中川・山崎, 2004）。しかしながら、児童についても同様に、罪悪感と親密性が関連するのかがどうかは不明である。そこで、本研究では、親密性が謝罪時の罪悪感および謝罪する理由に及ぼす影響についても検討することを目的とした。

方 法

対象児

京都市内の公立小学校1校の1、3、5年生、計188名を対象に調査を行った。内訳は、1年生66名（女子35名、男子30名、不明1名、平均年齢7歳0ヶ月）、3年生59名（女子35名、男子24名、平均年齢9歳2ヶ月）、5年生63名（女子30名、男子32名、不明1名、平均年齢11歳2ヶ月）であった。

材料

B5判の冊子形式の質問紙を用いた。小学校で学習する漢字を考慮し、内容は同一であるが文字の

表記形式のみ異なるものを学年ごとに用意した。ただし、漢字にはすべてひらがなでふりがなをつけ、文章は読みやすいようにすべて分ち書き（文節と文節の間に空白を置く書き方）で統一した。

質問紙の内容

まず、仮想場面に登場する加害者と被害者の親密性について、中川・山崎（2004）、芝崎（2008）を参考に、以下の教示を提示した。

高親密条件：「AくんとBくんは同じ学校の〇年生（対象児の学年）です。二人はいつも一緒に遊んでいるとても仲良しのお友達です。」

低親密条件：「AくんとBくんは同じ学校の〇年生（対象児の学年）です。でも二人は一度も一緒に遊んだことがないあまりよく知らないお友達です。」

次に、以下の仮想場面を提示した。「Aくんが廊下を歩いていると、突然人が飛び出してきました。Aくんはあわててよけたので、近くにいたBくんとぶつかってしまいました。Bくんはこけそうになりましたが、こけなくてけがもありませんでした。」

仮想場面の提示後、以下の2つの質問に回答してもらった。

謝罪質問：「もしあなたがAくんだったら、Bくんに謝りますか？」

罪悪感質問：「もしあなたがAくんだったら、どれくらい『悪いことをしたなあ』と思いますか？」

謝罪質問には、「謝る」か「謝らない」の2択、罪悪感質問には、「とても悪いことをしたなあと思う」～「ぜんぜん悪いことをしたなあと思わない」の4件法で回答してもらった。

さらに、「AくんはBくんに『ごめんね』と言いました。」という一文を提示した後、加害者が謝罪する理由に関する質問を行う前に、親密性の条件について、子どもが理解しているかどうかを確認するため、以下の確認質問を行った。「AくんとBくんは仲良しですか？それともよく知らないお友達ですか？」（回答は、「仲良しのお友達」か「よく知らないお友達」の2択）

最後に、加害者が謝罪した理由に関する以下の2つの質問について、それぞれ4件法で回答してもらった。

罰回避質問：「Aくんが謝ったとき、近くで先生が見ている、怒られたらいやだなあという気持ちだったと思いますか？」

印象悪化抑制質問：「Aくんが謝ったとき、Bくんに嫌われたらいやだなあという気持ちだったと思いますか？」

手続き

親密性（高、低）の2条件を被験者間要因とし、各学年計2クラスにそれぞれの条件を振り分けた。調査は、クラス毎に集団で実施し、調査者による読み上げのもと、全員が同時に進む形式で行った。

結果

分析方法

記入漏れのあった場合や親密性に関する確認質問において誤答した場合、以下の分析から除外した。最終的に分析対象となったのは、1年生54名（女子29名、男子25名）、3年生51名（女子30名、男子21名）、5年生53名（女子24名、男子29名）であった。

謝罪時の罪悪感

「謝罪質問」において、「謝らない」と回答したのは、高親密条件では5年生が1名のみ、低親密条件では3年生が5名、5年生が6名であった。

謝罪時の罪悪感について検討するため、「謝る」と回答した計146名を対象に、「罪悪感質問」に対する回答の分析を行った。「とても～」を3点、「すこし～」を2点、「あまり～」を1点、「ぜんぜん～」を0点として得点化し、罪悪感得点とした。学年、条件ごとの平均得点を図1に示した。

学年および親密性によって、罪悪感得点に違いがみられるかを検討するため、学年(3)×親密性(2)の2要因分散分析を行った。その結果、学年の主効果のみ有意で($F(2, 140)=5.69, p<.01$)、どの学年においても親密性による罪悪感得点の違いはみられなかった。また、学年差について、ライアン法による多重比較を行ったところ、1年生と5年生との間で差が有意であった。すなわち、罪悪感得点は、親密性の高低に関わらず、1年生の方が5年生より高いことが示された。

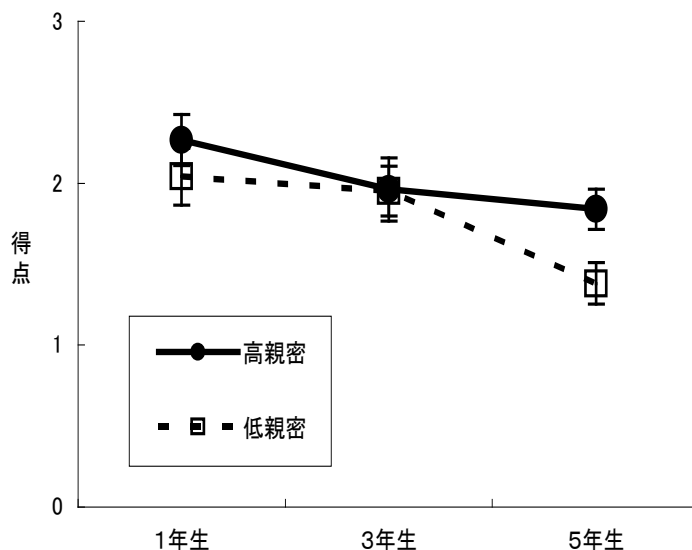


図1 学年・条件ごとの罪悪感得点の平均と標準誤差

罰回避

分析対象となった児童全員を対象に、罰回避質問に対する回答について、「とても～」を3点、「すこし～」を2点、「あまり～」を1点、「ぜんぜん～」を0点として得点化し、罰回避得点とした。学

年，条件ごとの平均得点を図2に示した。

学年および親密性によって，罰回避得点に違いがみられるかを検討するため，学年（3）×親密性（2）の2要因分散分析を行った。その結果，学年の主効果が有意であった（ $F(2, 152)=21.28, p<.01$ ）。ライアン法による多重比較を行ったところ，すべての学年間で差が有意であった。また，親密性の主効果も有意で（ $F(1, 152)=11.32, p<.01$ ），高親密条件の方が低親密条件よりも罰回避得点が高かった。交互作用は有意ではなかった（ $F(2, 152)=2.50, n.s.$ ）。すなわち，罰回避得点は親密性によって異なるものの，親密性の高低に関わらず，学年が上がるにつれて低くなることが示された。

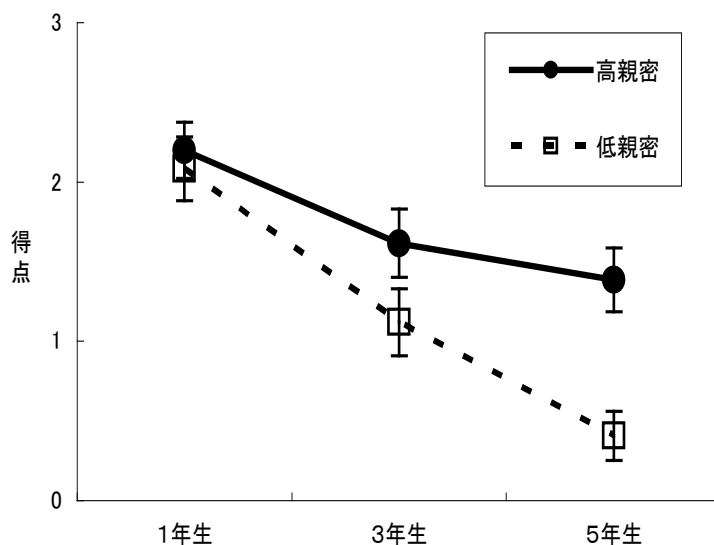


図2 学年・条件ごとの罰回避得点の平均と標準誤差

印象悪化抑制

分析対象となった児童全員を対象に，印象悪化抑制質問に対する回答について，「とても～」を3点，「すこし～」を2点，「あまり～」を1点，「ぜんぜん～」を0点として得点化し，印象悪化抑制得点とした。学年，条件ごとの平均得点を図3に示した。

学年および親密性によって，印象悪化抑制得点に違いがみられるかを検討するため，学年（3）×親密性（2）の2要因分散分析を行った。その結果，学年の主効果が有意であった（ $F(2, 152)=10.86, p<.01$ ）。ライアン法による多重比較を行ったところ，1年生と5年生，1年生と3年生との間で差が有意であった。ただし，学年×親密性の交互作用が有意で（ $F(2, 152)=6.16, p<.01$ ），低親密条件においてのみ学年差が有意であり，学年が上がるにつれ得点が低くなるが，高親密条件においては学年による差が有意ではなかった。また，3年生と5年生において親密性の単純主効果が有意で，高親密性条件の方が低親密条件よりも得点が高かった。

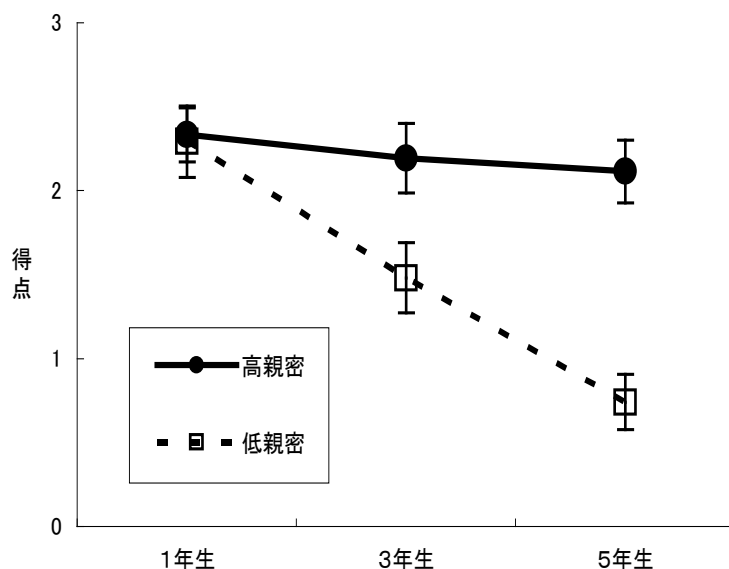


図3 学年・条件ごとの印象悪化抑制得点の平均と標準偏差

考 察

罪悪感に及ぼす学年および親密性の影響

謝罪時の罪悪感については親密性による差が有意ではなく、学年差のみが有意であった。学年差については、1年生から5年生にかけて徐々に罪悪感が低くなるという発達的变化がみられた。この結果は、自己に非がない場面において、6年生よりも2年生で罪悪感が高いことを示した芝崎・山崎（2009）と同様の結果であるといえる。すなわち、本研究で用いた仮想場面も加害者の責任は低かったことが学年差に影響しているのではないかと考えられる。しかし、なぜ自己に非がない場面で、学年が上がると罪悪感が下がるのかについては解釈の余地が残されており、今後検討していくべき課題である。

また、親密性による差がみられないという結果は、罪悪感と親密性の関連を示す先行研究（Baumeister, et. al., 1995; 中川・山崎, 2004）とは一致しないものであった。この結果の解釈の1つとして、罪悪感と親密性の関連は、幼児期にみられるものの、児童期においてはみられなくなり、大人になるとまた関連するようになるというように、発達的に変化する可能性が考えられる。ただし、先行研究と本研究とは、異なる方法に基づいて検討しているため、そのような発達過程をたどるのかどうかについては、異なる年齢層で同一の方法を用いるなど、さらなる検討が必要であろう。

罰回避に及ぼす学年および親密性の影響

罰回避得点については、全体として、親密性が高いと罰回避得点が高いという結果であったが、親密性の高低に関わらず、学年が上がるにつれて得点が低くなった。幼児期には保育者からの罰の回避を理由として謝る場合が多いことが指摘されているが（中川・山崎, 2004）、児童期においては次第

に罰回避を理由に謝罪することは少なくなるのではないかという予測と一致する結果であったといえる。この結果は、道徳的な判断に関して、他律的な道徳から自律的な道徳へと発達する (Piaget, 1932) ことと密接に関わっていると推察される。

また、親密性が高いと罰回避得点が高いという結果も得られたが、6歳児は親密性が高い相手に誠実な謝罪を用い、親密性が低い相手には道具的謝罪を用いるという中川・山崎 (2004) の結果から考えると、矛盾する結果であると考えられる。ただし、中川・山崎 (2004) では、保育者の罰を回避するために謝ったか、悪いことをしたと思って謝ったかの2択によって幼児の反応を検討しているのに対し、本研究ではそれぞれについて4件法で評定してもらっている。親密性が高い相手に罪悪感の伴う謝罪をするといっても、同時に保育者からの罰も恐れている場合もあると思われることから、本研究の結果と中川・山崎 (2004) の結果が全く矛盾するとも言い切れない。

しかしながら、なぜ親密性の高い相手の方が罰を回避したい気持ちが高くなるのかということについては不明である。芝崎・山崎 (2008) は、自己に非が認められない状況では、謝罪する明確な理由がなくとも事態収束をはかることを目的として謝罪が道具的に用いられる可能性を示しており、本研究の結果も同様に解釈可能かもしれない。すなわち、親密性の低い相手に対しては、その場の葛藤を終結させることが重視される結果、罰を回避することまで考える必要がなく、得点が低くなっているという可能性が考えられるだろう。

印象悪化抑制に及ぼす学年および親密性の影響

印象悪化抑制得点については、学年×親密性の交互作用が有意で、親密性によって発達の変化が異なった。すなわち、親密性が低い場合、学年が上がるにつれて印象悪化抑制得点が低くなっていくが、親密性が高い場合には、どの学年においても得点が高かった。児童期は友達集団への受け入れについての関心が増加する時期であり (Parker & Gottman, 1989)、相手に嫌われないように謝ることが多くなるのではないかという予測とは一致しない結果であった。ただし、罪悪感や罰回避においては、親密性の高低に関わらず、学年が上がると得点が下がったのに対し、印象悪化抑制については、親密性が高い相手に対して学年が上がっても得点が下がらないということから、児童期の子どもにとって、親密な他者からの印象の重要性が高いことを示唆している。

しかし、3, 5年生は親密性が低い相手には得点が低くなるのに対し、1年生は親密性の高低によって得点に違いがみられなかった。幼児期においては、親密性の高い他者に対する謝罪生起が年齢に伴い高くなるが (中川・山崎, 2004)、その背景には、謝罪することによって許容を得られ、他者評価の低下を防ぐことができるという印象悪化抑制についての謝罪効果の認識の発達があることが示唆されているが (芝崎, 2008)、芝崎 (2008) は、年齢に伴う親密性の持つ意味の変化を考慮する必要性を指摘している。すなわち、親密な他者は自分を決して傷つけないであろうという期待があると考えられ (Whitesell & Harter, 1996)、そのような期待が発達に伴って変化し、謝罪生起や謝罪効果の認識に影響する可能性があると考えている。本研究においても、印象悪化抑制について、1年生は親密性による違いがみられなかったが、このことは、そのような親密な他者への期待の認識が1年生においては他の学年と異なった可能性が考えられる。

今後の課題

本研究では、児童の謝罪時の罪悪感や謝罪する理由に親密性が及ぼす影響について検討し、罰回避と印象悪化抑制において、被害者との親密性の影響を受けることが明らかになった。また、謝罪を動機づける罪悪感や罰回避、印象悪化抑制などの理由について、児童期における発達的变化を明らかにすることができたが、なぜ発達に伴いそのような変化が生じるのかについては明らかになっておらず、今後検討していく必要がある。

引用文献

- Baumeister, R. F., Reis, H. T., & Delespaul, P. A. E. G. (1995). Subjective and experiential correlates of guilt in daily life. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1256-1268.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982). Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1989). Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- 早川貴子. (2009). 対人葛藤場面における児童期から思春期までの謝罪行動と許しに関する発達の研究 ～相手との親密性との関連から～. *発達研究*, 23, 131-142.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. (1996). Across-cultural study of preference of accounts: Relationship closeness, harm severity, and motives of account making. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 913-934.
- McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L. Jr., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1998). Interpersonal forgiving in close relationship: II. Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1586-1603.
- 中川美和・山崎 晃. (2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. *教育心理学研究*, 52, 159-169.
- 中川美和・山崎 晃. (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. *発達心理学研究*, 16, 165-174.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- Ohbuchi, K. & Sato, K. (1994). Children's reactions to mitigating accounts: Apologies, excuses, and intentionality of harm. *The Journal of Social Psychology*, 134, 5-17.
- Parker, J. G., & Gottman, J. M. (1989). Social and emotional development in relational context: Friendship interaction from early childhood to adolescence. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley. pp. 95-131.

- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York: Free Press.
- 齊藤 勇・荻野七重. (2004). 自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ. 立正大学心理学部研究紀要, 2, 17-33.
- 芝崎美和. (2008). 親密性が幼児の謝罪効果の認識に与える影響. 幼年教育研究年報, 30, 41-48.
- 芝崎美和・山崎 晃. (2008). 違反に対する責任の高低が児童の謝罪に及ぼす影響. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, p.306.
- 芝崎美和・山崎 晃. (2009). 違反に対する児童の認識—負うべき責任の高さによる認識の違い—. 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, p.282.
- 田村綾菜. (2008a). 児童の謝罪認知に及ぼす立場と自発性の影響. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, p.307
- 田村綾菜. (2008b). 自発的でない謝罪に対する児童の反応. 日本発達心理学会第19回大会論文集, p.336
- Whitesell, N. R., & Hatter, S. (1996). The interpersonal context of emotion: Anger with close friends and classmates. *Child Development*, 67, 1345-1359.

謝 辞

調査にご協力いただいた小学校の先生方, 児童の皆様に心より御礼申し上げます。